

学芸員養成教育と大学博物館のアウトリーチ活動の検討

メタデータ	言語: jpn 出版者: 全国大学博物館学講座協議会 公開日: 2019-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 駒見, 和夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20450

学芸員養成教育と大学博物館の アウトリーチ活動の検討

駒見和夫

はじめに

日本博物館協会の平成 23(2011) 年度の統計によると、わが国の大学博物館は 123 館を数える（日本博物館協会 2013）。博物館法の区分で見ると、博物館相当施設が 83 館、その他の施設が 40 館となる。同年度の大学数は国公立を合わせて 780 であり、複数の博物館を開設する大学も若干数みられるが、博物館を併設する大学は全体の 15% 程度でしかなく、かなり少ない割合といえよう。この大学博物館については、平成 8(1996)年に学術審議会学術資料部会が「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について」と題する報告を提出し、人びとの多様な学習ニーズに対応できる大学博物館設置の推進が提言された（学術審議会 1996）。提言以前の平成 3 年度の大学博物館数は 60 館であり（日本博物館協会 1993）、以後の 20 年間に館数は倍増している。けれども、平成 3(1991) 年度の大学数は 514 で、大学博物館を併設する割合は約 12% であったことから、その割合は現在に至るも微増でしかない。この数値をみるかぎり、大学において博物館の開設が積極的に進められてきたとは捉え難いのである。

一方、学芸員養成課程を開講している大学は、平成 25(2013)年 4 月 1 日現在で 300 を数える¹⁾。4 年生大学が 291、短期大学が 9 である。大学博物館が必ずしも学芸員養成課程開講大学に開設されているわけではないが、学芸員養成課程開講大学数と大学博物館の数を比較すると、その設置割合はおおよそ 4 割以下の数値となる。この状況からすると、大学における学芸員養成教育と大学博物館は関連性があまり意識されていないと捉えることができる。さらにいえば、そのような認識が一般的であるため、大学博物館が設置されていても、学芸員養成教育との相互連携を図る学内環境が生じ難くなっているように看取される。

大学博物館は学術研究の機関である大学組織の一部をなすものであり、研究のための資料を中心に学術コレクションを形成し、各学科分野の専門的研究を主要な機能に位置づけることは大切であろう。その一方で、大学は高等教育機関でもあり、学内に向けて多様な学習の機会を主体的に提供する学生教育の機能の充実も、大学博物館における必須の活動であるべきと捉えられる。そのうえで、社会に開放して幅広い人びとの学習要求に応えることが求められるのである。この重要であるべき大学博物館と学生教育とのかかわりに関しては、具体的な考察や問題提起がほとんどおこなわれてこなかった。大学博物館の活動を設定するにあたり、学生の学習との結びつきをどのように設定し、いかにして相互の目的達成に効果を生み出すかについても、多角的な検討が必要ではないかと思われる。このことは大学博物館を活性化させるとともに、機能を高めるための方向性を導き出すうえでも示唆をもつであろう。

本稿では、大学博物館と学生教育に関する課題へのアプローチとして学芸員養成教育に視点を置き、和洋女子大学での実践をもとに検討をおこなう。和洋女子大学には大学博物館である和洋女子大学文化資料館が開設されており、学芸員講座履修学生が運営に参加する博物館出前

講座に取り組んでいる。そのなかで、平成24（2012）年10月から翌年9月までの1年間、全国大学博物館学講座協議会東日本部会の研究助成を得て、大学博物館でのアウトリーチ活動と学芸員養成教育とを結びつけるためのシステム構築を目的に、学生に対する出前講座プログラムを遂行し、学生の自己評価による成果検証を実施した。その実践の経過と評価の分析を中心に、学生教育と有義的に結びつく大学博物館の活動について、一つのあり方を提示することを試みたい。

1. 出前講座での試み

和洋女子大学文化資料館では、館外での学習支援活動として小・中・高等学校への博物館出前講座に取り組んでいる。この出前講座では大学博物館の特質の発揮を意図して、平成21（2009）年度から学芸員講座履修学生が参加する体制を組み、チームティーチングによるワークショップを中心にした講座をおこなってきた。これまでの実践検証から、博物館教育に関心のある学生と文化資料館の学芸員が一体となって進めることにより、講座の全体をとおして多様なコミュニケーションの機会の創出が可能となり、児童生徒の理解度と満足度を高める効果がみとめられ、参加の教員からも一定の評価が得られている（駒見・梅原 2011）。学芸員課程履修学生の参加は、受講者において博物館学習の効果を高めることが確認できつつある。

一方、参加した大学生についてはどのような学習効果が生じるのか、それを把握するために学生に対する教育プログラムを設定し、平成24（2012）年10月から1年間の文化資料館による出前講座において実践検討した。この教育プログラムによる出前講座は6学校において合計8回実施し、学芸員講座履修学生の参加者は延べ29名となる（表1）。参加学生の学年の内訳は、2年生が2名、3年生が16名、4年生が11名であった。講座ごとに、次の①～⑤の順序と内容で参加学生に対する研修計画を立て、これに沿って取り組んだ。

① 第1回事前研修（約2時間）

当該出前講座の実施計画書をもとに、学習テーマとねらい、具体的な学習内容、児童生徒の活動および指導上の留意点について説明し、学生が自己の役割を理解して適切な行動がとれるように、参加する学芸員と学生の意見交換をおこなった。その際、講座の

表1 実施出前講座の一覧

学校：学年	実施日	学習テーマ	参加学生数
市川市立第一中学校：3年生	2012年10月6日	考古学で体験する古代史ー古代の生活にふれよう！ー	3
五霞町立五霞中学校：1年生	2012年10月10日	“五霞町”の成り立ちを考えようー縄文時代の五霞ー	4
五霞町立五霞中学校：2年生	2012年10月10日	“五霞町”の成り立ちを考えようー縄文時代の五霞ー	4
東京都立葛飾特別支援学校（高等学校）：2年生（軽度知的障害）	2012年11月2日	土の中から出てきたよー土器、そして博物館ー	3
東京都立葛飾特別支援学校（高等学校）：2年生（中度知的障害）	2012年11月9日	土の中から出てきたよー土器、そして博物館ー	3
五霞町立五霞西小学校：5・6年生	2012年11月14日	“五霞町”の成り立ちを考えようー縄文時代の五霞ー	4
五霞町立五霞東小学校：6年生	2012年11月14日	“五霞町”の成り立ちを考えようー縄文時代の五霞ー	4
和洋国府台女子中学校：2年生	2013年6月12日	国府台・国分の成り立ちを探る	4

実施方法について学生のアイデアを求め、適切な方法などは実際に取り入れるようにした。また、講座では実物資料（土器、貝殻、裁縫雛形作品など）の触察体験のワークショップを学生が中心となっておこなうため、講座で扱う博物館資料について基本的知識を教示し、各自がそれぞれの視点で詳細に調べることを当日までの課題とした。

② 第2回事前研修（約1時間）

出前講座実施の直前におこなった研修で、学生の役割と活動の最終的な確認が中心である。あわせて講座で扱う資料について学生が調べてきたことをそれぞれ発表し、誤った認識がないことを確認するとともに相互理解を図るようにした。また、講座での自己の役割と行動について不安に思っている学生もおり、その不安や緊張を和らげることに気を配って進めた。

③ 出前講座の実施

講座では、触察体験のワークショップと博物館の活用方法の説明が参加学生のおもな役割となる。触察体験では学生が児童生徒のなかに入り込み、各学生がそれぞれ5～10名程度をナビゲートする態勢を組んだ。その際、活発なコミュニケーションを意識しながら資料の観察点を話題として児童生徒に投げかけ、彼らが考えて意見を述べる場面を創出することを最大の留意点とした。また、博物館活用方法などの説明では、全体に伝わりやすいようにパワーポイントを用い、楽しみながら理解できるように表現方法などの工夫を学生に求めた。

④ 出前講座の省察と自己評価（約1時間）

出前講座の終了後、それぞれの感想や活動に対する評価点、反省点などについて参加者全員で意見交換を実施し、自己評価シートによって各自の省察と評価をおこなった。評価シートの内容は、児童生徒に対する印象、出前講座に取り組んだそれぞれの留意点、出前講座を實踐して考えた博物館活動におけるその意義、学芸員資格修得における出前講座実施プログラムの参加の意義、などについて記述するものである。

⑤ 学習成果の発表（約1時間）

出前講座の内容と実践の経過をパワーポイントにまとめ、学芸員課程の授業時に参加学生がプレゼンテーションをおこなった。それぞれの学習成果を確認するとともに、実践的な経験と学びを他の学生へも波及させることを意図したものである。

以上の過程を経て、22名（総数29名のうち7名は2回参加）の学生が実践学習をおこなった。出前講座は依頼学校のカリキュラム計画にもとづいて実施するため、学生は各自の授業時間割などに支障がない場合に参加の希望を申し出ることとしたが、多数の学生の希望が重って参加を断る場合もあった。そのため学芸員課程の授業や単位の一部とはしていない。和洋女子大学の学芸員課程履修学生は2～4年で合計121名であり、この1年間の実践における参加学生は全体の約18%となる。

2. 出前講座の実践例：和洋国府台女子中学校

出前講座の展開と学生の活動について、和洋国府台女子中学校での実践をもとに具体的に示すこととする。この出前講座は平成25(2013)年6月12日に実施し、対象は2年生4クラスの計108名で、2クラスずつ2回に分け各50分で進行した。中学校からは社会科担当教員の3

表2 和洋国府台女子中学校での出前講座の展開

主な学習内容・活動	指導上の留意点	配時
<p>導入：国府台の地名由来の言い伝え</p> <p>① 「鴻之鳥に与えた台地」と「国府の置かれた台地」について考える。</p> <p>② 国府に関する事柄について知識を確認する。</p>	<p>○国府台地名由来の二説を提示し、どちらを支持するか生徒の意見を聞く。</p> <p>○国府の内容は教科書の記述もひきながら確認する</p>	5分
<p>展開1：下総国府跡の発見</p> <p>① 和洋女子大学キャンパス内で実施された国府台遺跡の発掘調査でわかったことを知る。</p> <p>② 出土した奈良・平安時代の土器（中学校校地内の出土土器を中心に）をさわって観察し、古代の歴史を体験するとともに、土器を使っていた人たちの生活について話し合う。</p>	<p>○発掘調査の様子と出土遺物を写真で紹介し、明らかになった下総国府の概要を説明する。</p> <p>○土器の触察は大学生が中心となる。先生方にも参加してもらい、手触り・重さ・匂い・用途などの視点で観察し、話し合いを進めながら古代の生活のイメージを広げさせる。</p>	20分
<p>展開2：地名に息づく地域の歴史</p> <p>① 中学校の所在地である国分の地名について考え、校地内で実施された下総国分尼寺跡の発掘調査で明らかになったことを知る。</p> <p>② 「国府台」や「国分」の地名は、古代の土地利用の状況を示す歴史的な遺産・財産であることに気づく。</p>	<p>○中学校地内の発掘調査と出土遺物を写真で紹介し、下総国分尼寺について解説する。国分寺の概要は教科書の内容から発展させる。</p> <p>○古代から続く地名の例を提示し、地名の歴史的な重要性を伝えるとともに、身近な地域への愛着と誇りを芽生えさせる。</p>	10分
<p>展開3：国府・国分寺関連事象の再確認</p> <p>① 国府と国分寺に関する歴史的な事象について簡単なクイズに挑戦し、学んだ知識を確認するとともに、古代史への興味を高める。</p>	<p>○本講座の学習内容を中心に発展的事項も加えた歴史クイズを大学生が出題し、解説を加えて理解を深めさせる。</p>	10分
<p>まとめ：地域を学ぶ博物館の魅力</p> <p>① 地域の歴史を学ぶ場として、和洋女子大学文化資料館の利用の仕方と、歴史の学習方法を発見する。</p>	<p>○博物館の活用方法と学習スタイルの一例を示し、博物館のおもしろさに気づかせ、歴史学習への関心を高めさせる。</p>	5分

名が指導にあたり、学芸員課程履修の大学生は2年生2名と3年生2名が参加し、和洋女子大学文化資料館の学芸員2名とともに役割を分担した。

講座は当該中学校の日本史の授業カリキュラムに位置づけ、地域の身近な史跡を題材にして歴史学習への生徒の関心を深めることが学校側の目的であった。これを受けて、講座のテーマを『国府台・国分の成り立ちを探る』と決めた。そのうえで学習のねらいを、「和洋国府台女子中学校の校名になっている“国府台”と所在地である“国分”の地名由来から、奈良・平安時代の下総国府・国分寺の様相について発掘調査の成果をもとに理解を深める」「下総国府跡・国分尼寺跡から出土した土器をさわりながら観察し、古代の生活や地域の歴史を身近に感じることができる」「地域の歴史を調べるための博物館の存在とその活用方法がわかる」の3点に設定した。

講座の進行は表2のようにおこなった。講話はパワーポイントによる教材を作成し、これを用いながら2名の学芸員の対話形式で進めた。導入と展開1-①は“国府台”の地名由来の提示と発掘調査成果による下総国府跡の検証であり、展開1-②は土器の触察体験のワークショップで学生が活動の中心となる。各学生が10名程度の生徒を担当し、グループを組んで奈良・平安時代の土器を触察した。触察にあたっては手を洗う、両手でやさしく扱う、高く持ち上げないなどの資料保護の注意事項を事前に説明し、手ざわり、重さ、匂い、表面の模様、用途、日常使用している器との比較などを観察点として生徒に話題提示をおこない、会話を交わしながら生徒が考える場面を作るように、それぞれの学生が対応にあたった(図1)。また、触察の所見やスケッチを記入するワークシートも用いた。

展開2は、和洋国府台女子中学校の建設にあたって実施された下総国分尼寺跡の発掘調査の様子と成果を示し、あわせて古代の土地利用の状況が地名に受け継がれていることの確認である。次の展開3は、学習内容の確認および定着と今後の発展学習に向けた動機づけを意図したクイズで、まとめは歴史学習の場となる博物館の利用方法と学習スタイルの解説であり、両方も学生が進行と解説を担当した。

この出前講座の実施に際し、生徒(108名)と指導教員(3名)に対して無記名形式のアンケート調査をおこなった。講座の評価に関する生徒の回答結果の一部が図2で、グラフAとBは講座実施前、C・D・Eは実施後の質問と回答値である。

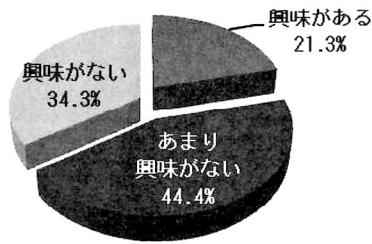
グラフAは身近な地域の歴史に対する関心度をはかる設問で、回答項目には「とても興味がある」を設けていたが選択者は皆無であったのに対し、「あまり興味がない」と「興味がない」を合わせると78.7%となり、全体的に関心度は低いものであった。この関心度を事後調査のグラフCと比較すると、「あまり興味もてなかった」と「興味もてなかった」の回答は合計で14.9%と大幅に少なくなっており、さらに、15.9%(17名)の生徒が「とても興味もてた」と答えるようになっている。

また、身近な地域の歴史学習における博物館利用の意欲をはかることを意図した設問では、グラフBの事前回答では利用意欲がみとめられる「思う」と「少し思う」が合わせて51.8%であり、「あまり思わない」と「思わない」の回答と比較すると意欲の

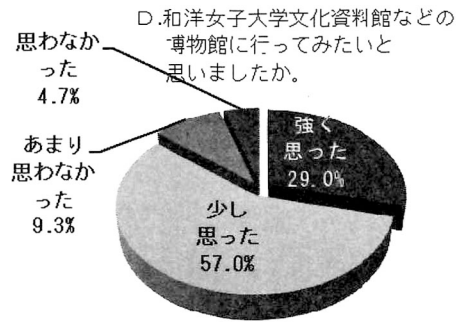
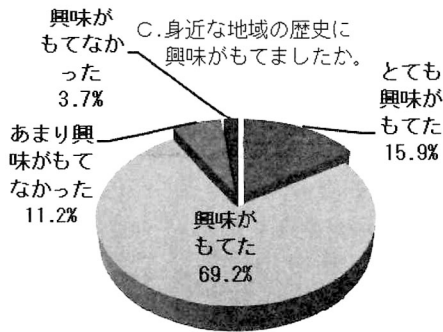
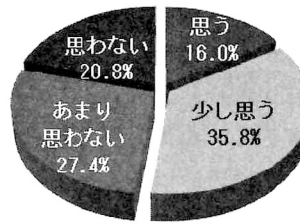


図1 土器の触察をナビゲートする学生

A.身近な地域の歴史に興味がありますか



B.身近な地域の歴史を勉強する場合に博物館を利用したいと思いますか。



E. 出前講座のどのような点が良かったですか（複数回答）

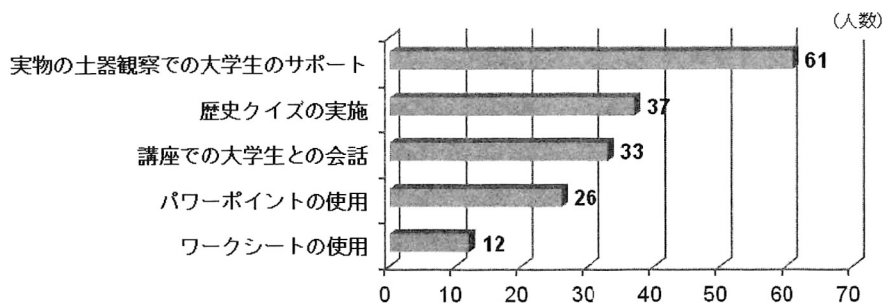


図2 生徒のアンケート回答（回答者108名：A・Bは事前調査、C～Dは事後調査）

有無がほぼ半々の割合となるが、「思わない」と答えたまったく意欲のない生徒が20.8%（22名）を占めていた。この状況が講座の実施後には、グラフDが示すように「強く思った」と「少し思った」で86.0%を占め、強い否定の「思わなかった」は4.7%（5名）となっており、グラフBと比べると博物館利用に対する意欲が大きく高まったと捉えられる。とりわけ、意欲をまったくもたない生徒が1/4以下に減少したことは意義をもつ成果といえよう。

このように、出前講座は生徒に対する学習目的をおおむね達成できたと判断されるが、その要因についてはグラフEから捉えることができる。今回の出前講座で良かったと思う事に関して、5項目を提示して選択回答する質問である。圧倒的に多いのが「土器観察での大学生

のサポート」で 56.5%の生徒がこれを評価しており、同様に大学生が直接かかわる「講座での大学生との会話」も生徒の 30.6%が良かった点としてあげている。また、2 番目に多く 34.3%の生徒が選んだ「歴史クイズの実施」についても、クイズの内容に対する評価とともに、大学生が主導してクイズを進めたことも包含されているものと推測される。したがって講座での学習目的の達成において、大学生が参加して学芸員とのチームティーチングで取り組んだことが、効果をもたらした主たる要因と捉えられるのである。

一方、指導にあたった 3 名の中学校教員が示した評価については、「学習効果があったか」という質問に対して全員が「効果があった」と回答し、「ある程度の効果があった」「あまり効果がなかった」「効果がなかった」の選択肢回答はなかった。「大学生がサポートする講座の実施方法は評価できるか」の質問には、「評価できる」：2 名、「ある程度評価できる」：1 名、「あまり評価できない」および「評価できない」：0 名。「出前講座の受講を今後も続けたいと思うか」に対しては、「是非続けたい」：2 名、「続けたい」：1 名、「あまり続けたくない」および「続けたくない」：0 名であった。意見記述欄には、生徒の学習をサポートする大学生の事前準備が整っていたことや、生徒が楽しそうに学習していたことへの大学生の貢献に対して評価する意見が示されていた。少人数の回答ではあるが、教員においても、大学生が参加して取り組んだ点が学習効果を高めた要素としてみとめられたのだと思われる。

この和洋国府台女子中学校での実践から捉えられるように、博物館出前講座における学芸員課程履修学生の参加は、学生への教育プログラムを立てて計画的に実施することにより、講座受講者である児童生徒の満足度と学習成果を高める点で、良好な効果を上げることが確認できるのである。

3. 出前講座参加学生の反応

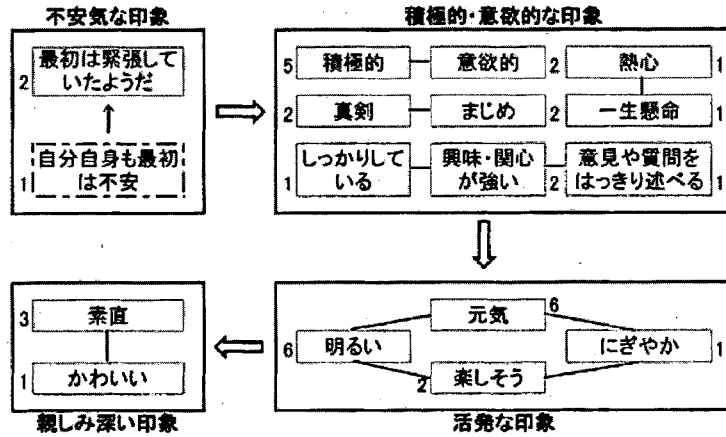
出前講座に参加した学芸員課程履修学生については、一連の教育プログラムと講座をとおして得られた事गराなどを把握するために、すべての講座で終了後に記述式の自己評価シートによる成果調査を実施した。回答学生は 22 名で、質問は次の①～④である。

- ① 児童生徒の印象はどうだったか
- ② どのような点に留意して出前講座にのぞんだか
- ③ 博物館が実施する出前講座の意義をどのように捉えたか
- ④ 学芸員資格の修得を目指すにあたり出前講座実施プログラムの参加はどのような意義があったか

回答の分析は、記述文からキーワードとなる要点を抽出しておこなった。当然ながら、各質問の回答記述からは要点を複数抽出できる場合が多く、これらを分類して取りまとめ、習得内容や学習成果などについて考察する方法をとった。各回答の記述のポイントを整理して図解したものが図 3・4 である。

まず、質問①については、大きくまとめると、児童生徒に対して“積極的・意欲的”と感じた学生が全体の 8 割近くにのぼり、「明るい」「元気」などの“活発な印象”をもった学生が 6 割以上を占めている（図 3-①）。詳細は、前者に含まれる回答には「積極的」「意欲的」のほか、「真剣」「まじめ」「熱心」「一生懸命」、さらに「興味・関心が強い」「意見や質問をはっきり述べる」の文言があり、これらと相反して児童生徒の印象を否定的に捉える回答は皆無で

① 児童生徒の印象はどうだったか



② どのような点に留意して出前講座にのぞんだか

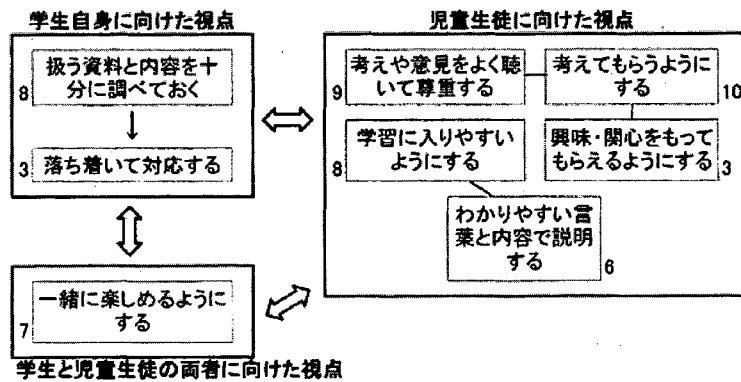


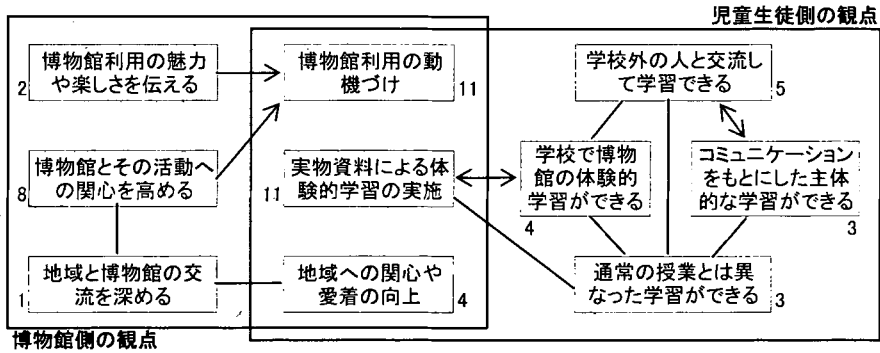
図3 出前講座参加学生の反応(1) - 図中の数字は人数 -

あった。彼らに対して消極性や非意欲性を学生が感じなかったのは、講座での学生の活動がおおむね適切であり、児童生徒に好意的に受け入れられていたことの反映と理解できよう。「明るい」「元気」などの印象も、学生の対応に児童生徒が積極的に反応していた証左とみられる。このほかに、児童生徒が「最初は緊張していたようだ」や「自分自身も最初は不安だった」、また「素直」や「かわいい」などの印象も若干あった。これらを斟酌すると、講座のスタート時には児童生徒と学生の相互に若干の不安と緊張もあったが、学生の適切な活動が児童生徒の積極性や意欲を引き出していったのだと捉えられよう。その結果、楽しい雰囲気が生み出されて児童生徒が活発に学習に取り組み、学生の側には「素直」で「かわいい」といった「親しみ深い印象」が芽生えたものと推測される。

質問②の回答では、記された内容は8項目に集約され、さらにそれらは、「学生自身に向けた視点」、「児童生徒に向けた視点」、「学生と児童生徒の両者に向けた視点」の3つの観点にまとめられる(図3-②)。「学生自身に向けた視点」の留意事項は、講座で扱う博物館資料と内容について十分に調べておくことと、緊張しないで落ち着いて対応することが述べられていた。

前者をあげたのは8名(36.4%)で、児童生徒の関心を引き出すには自らが関心を深めておく必要があるとの考えを示した学生もみられた。事前の教育プログラムで問題意識を高め、意欲

③ 博物館が実施する出前講座の意義をどのように捉えるか



④ 学芸員資格の修得を目指すにあたり出前講座実施プログラムの参加はどのような意義があったか

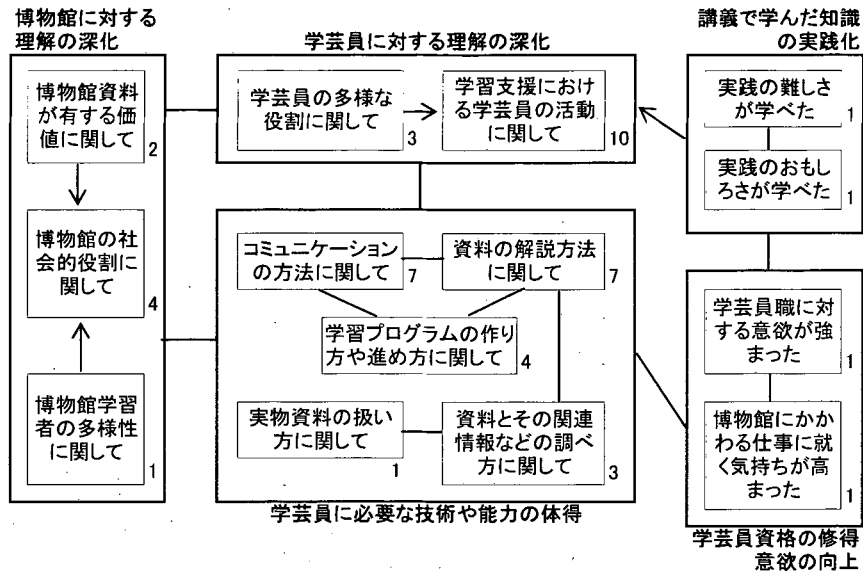


図4 出前講座参加学生の反応(2) - 図中の数字は人数 -

的に取り組んでいる状況が捉えられる。後者の落ち着いた対応するという意識も、学生の事前準備によって保障されるものと思われる、一連の意識過程とみられよう。

また、「児童生徒に向けた視点」については、まとめると5つの留意内容が記されていた。多いのは「考えや意見をよく聴いて尊重する」と「考えてもらうようにする」で、それぞれ9名(40.9%)と10名(45.5%)の学生が述べており、児童生徒を中心に彼らの目線に立って講座を進行しようとする気持ちがうかがわれる。同様の意識は、「学習に入りやすいようにする」(8名:36.4%)や「興味・関心をもってもらえるようにする」(3名:13.6%)からも読みとることができ、前者の具体的な手段として積極的に話しかける、名前を問う、笑顔で接する、褒めるなどが示されていた。ほかに、「わかりやすい言葉と内容で説明する」(6名:27.3%)も比較的多くの学生が留意していた事項である。

そして、「学生と児童生徒の両者に向けた視点」については、一緒に楽しめるように工夫や配慮する内容で、7名(31.8%)の学生が記していた。具体的には児童生徒に楽しんでもらう

とともに自らも楽しみ、コミュニケーションや幅広い交流を意識することなどがあげられており、楽しめる学びの空間を創出することを留意したとの意見もあった。この点は講座の事前研修でも指摘している事から、それをふまえた学生の意識なのであろう。

質問③に対する回答は、“博物館側の観点”による意義、受講者である“児童生徒側の観点”からのもの、さらに両方に重なる捉え方がみられた(図4-③)。“博物館側の観点”に立つ意義では、「博物館利用の動機づけ」と「実物資料による体験的学習の実施」が目立った意見で、ともに11名(50%)の学生があげており、これらは児童生徒側からの意義としてもみとめられる事らとなろう。後者に関しては、実物を教材とした学習は博物館にしかできないことでありその果たすべき使命としての意義を述べる考えや、児童生徒にとっては教科書だけでは学べない体験学習ができることに価値をみとめる意見が記されていた。また、「地域への関心や愛着の向上」(4名:18.2%)は、各講座での学習テーマの一つに地域学習を掲げていたために示されたものと推測されるが、これも両方での意義といえる。

一方、博物館における意義については「博物館とその活動への関心を高める」が顕著な意見で、8名(36.4%)が指摘している。「博物館利用の魅力や楽しさを伝える」(2名)も博物館にとって価値のある事から、博物館の堅苦しいイメージを払拭することの意義を指摘する記述もあった。つまり、博物館活動への関心を高めて魅力や楽しさを伝えることは博物館にとって意義深いことであるが、それが博物館利用の動機づけにつながり、児童生徒にも利益となるのだと捉えているのであろう。ほかに「地域と博物館の交流を深める」(1名)との考えは、実際に講座に参加したからこそ感じる事ができた認識といえる。この理解は、博物館活動への関心を高めることや、地域への関心・愛着の向上と関連するものと考えられる。

また、“児童生徒の観点”に立った意義は、「学校外の人と交流して学習できる」(5名:22.7%)、「学校で博物館の体験的学習ができる」(4名:18.2%)、「コミュニケーションをもとにした主体的な学習ができる」(3名:13.6%)、「通常の授業とは異なったが学習ができる」(同)が示されていた。このうち、学校外の人と交流して学習することは、児童生徒が社会に視野を広げる契機となる効果を生み出すとの指摘があった。学校で博物館の体験的学習ができることに関しては「実物資料による体験的学習の実施」とも共通の部分もあるが、博物館での一般的なルールに縛られず実物資料にさわりながらお互いに意見を述べ合って、にぎやかに楽しく学ぶことができる点で、博物館での実地学習では得られない出前講座独自の意義を述べる意見もみられた。そして、これらの4つにまとめた回答はいずれも相互に関連性のある認識であり、全体で7割近くの学生が、学校という学習の場における児童生徒の観点から出前講座の意義を考えているのである。多くの学生が博物館だけの立場からみた一方的な理解にとどまっていないのは、やはり実践の場で学んだ成果として評価できよう。それとともに、学校外の人と交流してコミュニケーションをもとにした主体的な学習ができることは、この実践のように学生が参加してチームティーチングが可能となる、大学博物館において取り組む出前講座ならではの意義といえる。

質問④は、出前講座実施プログラムに参加したことが学芸員資格の修得を目指すにあたりどのような意義があったかを尋ねた質問で、かなり多様な意見が記されていた(図4-④)。集約すると、ほとんどは学芸員や博物館の活動に関する理解の深化に意義をみとめる内容であった。このうちもっとも多いのは“学芸員に必要な技術や能力の体得”としてまとめた記述、一連の

プログラムにおいて技術や能力を実践的に身につけるまでには至らないが、その重要性を認識・実感できたとする内容がほとんどを占めている。短期的な学習プログラムであるため当然の結果と思われるが、具体的には「コミュニケーションの方法に関して」と「資料の解説方法に関して」が多く、いずれも7名(31.8%)が記していた。この前者には、博物館の学習支援において学習者と対面したコミュニケーションの大切さを実感できたことが大きな意義であったとする意見や、コミュニケーションが学習を楽しくすることがわかったとの記述などがあった。チームティーチングで実施する出前講座は、直接的なコミュニケーションの機会を多く創出できることに利点が見出せるのであり、その点を事前学習の際に強調していたこともあり、学生が意識的に対応して学び得た成果と捉えたものと思われる。後者についてはコミュニケーションとも関連する内容で、わかりやすく解説する力が身についたことや、児童生徒に伝えることの難しさがわかった点に意義があったとする意見である。また、「学習プログラムの作り方や進め方に関して」(4名:18.2%)は、講座の実施にあたり十分な事前準備の大切さを学べたことや、児童に学んでもらうための多様な工夫を体験できたことに意義を感じた意見であり、学生との事前学習において講座運営の方法を学生の意見を求めながら検討した効果と推察される。ほかに、「資料とその関連情報などの調べ方に関して」(3名:13.6%)は、講座で扱った実物資料の事前調査が自分自身の関心と知識を深めるうえで意義があったとするもので、資料の解説方法にもつながる事からであり、これも学生がおこなった事前学習の効果と捉えられる。「実物資料の扱い方に関して」(1名)は、実物の土器を活用したことで、博物館資料の適切な取扱い方法を体得できた点に意義をみとめる内容であった。

また、“学芸員に対する理解の深化”に意義をみとめる記述は、「学芸員の多様な役割に関して」(3名:13.6%)と、「学習支援における学芸員の活動に関して」(10名:45.5%)の内容にまとめられる。前者には、館外でも活動する学芸員の仕事を具体的にイメージできるようになったことを意義とする考えなどがあった。後者においては質問④でもっとも多い意見で、出前講座の実践をとおして学芸員にとって学習支援が大切な役割であり、その活動を実践することで認識や理解が深まった点で意義が大きかったとしているのである。一方で、この両者を一連で示している記述もみられ、学芸員の多様な役割を知り、そのうえで学習支援の活動の理解を深めることができたとする意識の流れが捉えられる。

そして、“博物館に対する理解の深化”に意義をみとめる内容は、「博物館の社会的役割に関して」(4名:18.2%)と、「博物館資料が有する価値に関して」(2名)、「博物館学習者の多様性に関して」(1名)の事からであった。社会的役割に関する記述には、博物館がだれのためにあるべきか考えることができたことや、博物館活動に対して多様なイメージがもてたことなどについて、博物館資料に関してはそれが有する学びの価値が実感できた点などが指摘されていた。博物館学習者の多様性にかかわる指摘は、特別支援学校で知的障害の生徒を対象にした講座の参加者で、博物館が多様な人たちに学習を提供しなければならないと体験的に理解できたことに意義があったと述べている。博物館における資料の学びの価値や学習者の多様性を認識することも、博物館の社会的役割に対して理解を深めることにつながっていくのであろう。

ほかには、“講義で学んだ知識の実践化”と“学芸員資格の修得意欲の向上”に意義を位置づける考えがわずかにみられた。前者は机上で学んだ知識や技術を実践する難しさを指摘したものと、これとは逆に、実践のおもしろさが学べた点にこのプログラムに参加した意義をみとめ

る記述があった。いずれにしろ、知識の実践化が学芸員や博物館の理解の深化に結びついていくのだと思われる。そして後者については、質問④の回答としてもっとも多く提示されるであろうと期待していた内容であった。学生に対する学芸員養成教育の観点では、出前講座プログラムの参加経験が学芸員や博物館関係職に就くことへの関心を深め、資格修得に向けて学習意欲を高めることを意図していた。ところが予測に反して、「学芸員職に対する意欲が強まった」と「博物館にかかわる仕事に就く気持ちが高まった」を1名ずつが記しているだけであった。質問に対して学生が丁寧に具体的に記述しようとしたのかもしれないが、先にみたように学生の本プログラムへの参加の満足度が高いにもかかわらず、それが博物館にかかわる就職意欲の向上には強くむすびつかないようである。

ちなみに、平成21(2009)年の和洋女子大学での調査であるが、2年生の学芸員課程履修のスタート時に卒業後の進路希望のアンケートを実施したところ、学芸員や博物館関係に就職を希望する学生は全体の17.0%であった(駒見 2010)。その一方で、何らかの資格を取得したいことが履修動機の学生が37.5%であり、それ以外も含めると、学芸員課程での学修が将来の社会生活に役立つ多様な知識や技術の習得を目的にしている学生が大多数を占めていた。このような状況を鑑みると、出前講座プログラムに積極的に参加した大方の学生の意図は、幅広い社会経験を積んで学びを広げることに重きを置いていると考えられるのである。

4. 成果と課題

この博物館出前講座実施プログラムの実践と検討において、学芸員課程履修学生に対する計画的な教育プログラムを立て、彼らの参加を得てチームティーチングの態勢で実施することにより、講座受講者である児童生徒の満足度と学習成果を高め、また教員側の評価の点でも良好な効果を上げることが確認された。意欲的で適切に活動する大学生の参加は、児童生徒だけでなく教員からも、学習効果を高めるスタイルとしてきわめて好意的に受けとってもらえた。一般の博物館では実施が難しい方法であり、大学博物館の利点を生かした運営形態として構築できるはずである。

そして、このプログラムは参加した学生においても満足度が高く、一定の教育効果をもとめることができた。学生に対する教育プログラムは、2回の事前研修と、講座で扱う博物館資料に関する自主研究、講座の実践、省察と発表を中心とした事後研修で組み立て実施した。その結果、学生の評価シートに表れているように、事前の教育プログラムで問題意識が高まって意欲的に取り組むことができたため、充実した学習経験となったようである。学生への事後の評価シートにこのプログラム全体に対する感想と要望の自由記述欄を末尾に付したところ、再度の参加を望む意見を12名(54.5%)が記しており、学生にとっておおむね有益な学習機会であったものと判断される。同じく自由記述では、プログラムの実践が楽しかったとする感想を9名(40.9%)が述べていることから、かなり高い満足感がうかがえる。そして事前の研修や自主学習は、学生の既得の知識の再確認と新たな見識の獲得をもたらす場であったとともに、実際の講座のスムーズな進行を保障する場ともなっていた。計画的な教育プログラムをもとに遂行することで、参加学生の学習成果が高まる事実が把握できた。

ただし、今回の事前研修は必ずしも十分な内容ではなかった。評価シートの自由記述には、事前研修の時間を増やして講座で使用するワークシートの内容を参加者で深く検討するべきと

の指摘や、博物館資料に関する自分自身の事前学習が不足していたとする反省などが、6名（27.3%）の学生から述べられていた。今回の実践ように、授業カリキュラム以外で研修の時間を安定的に確保するのは容易ではないため、学芸員養成課程と大学博物館の年間計画のなかで、出前講座に関心のある学生を対象に、事前研修の一部を定期的に開催するシステムを作ることが必要と思われる。

また、出前講座の参加実践は、当然のことではあるが、机上の学習では得られない学芸員や博物館の活動に対する認識、さらには実践力を学生に育む効果を生んでいる。多くの学生が博物館だけの立場からみた一方向的な理解にとどまっておらず、学校という学習の場における児童生徒の観点から博物館活動の意義を考えるようになっており、実践の場でなければ学べない成果と捉えられる。また、児童生徒を中心に彼らの目線に立って講座を進行し、楽しめる学びの空間の創出に留意している学生の姿勢も同様に実践的学習の成果といえよう。実践的な技術や能力は容易に身につくものではないが、博物館の学習支援におけるコミュニケーションの難しさと楽しさに気づいた学生などは、その力が少しでも育まれた証だと思われる。

このような認識や意識の深化を中心とした学習成果は、期待に反して、学芸員などの博物館関係職に就く意欲の向上には強く結びつかないようであった。その一方で、上記のようにこのプログラムが楽しかったと感じ、さらに再度参加したいとする学生も多く、充実度や満足度が高いものだったといえる。つまり、学生の多くは出前講座プログラムについて、社会実践をともなう経験を積んで将来に幅広く役立つであろう学習と捉えているのである。学芸員養成教育としては残念な感もあるが、大学教育の全般的な役割や、学生が置かれた現実的な就職環境とニーズを斟酌すると、多様な学習動機や目的も尊重すべきと思われる。ただし、このような実践学習が効果を上げるのは、博物館に関する基礎的な知識と関心が基盤となっているからであり、学芸員養成教育の一環として取り組む点にこそ意義をもつのである。大学博物館の活動と連携した学芸員養成教育が有する大きな価値と考えられる。

おわりに

本稿で示した実践は試行的な取り組みであるが、大学博物館がアウトリーチ活動をおこない、そこに学芸員養成課程の学生が参加することは、学生教育と大学博物館の活動を有義的に結びつける主要なシステムになる可能性が指摘できる。両者の相互連携を進めることは、生涯学習社会に位置づく大学博物館としての活動を広げることにもつながるはずである。

この実践研究は、平成24年度全国大学博物館学講座協議会東日本部会研究助成を受けた「学芸員養成教育に資する大学博物館のアウトリーチ活動の実践的研究」の成果の一部となる。出前講座の実施にあたっては、各学校の快いご理解を賜り実践することができた。また、出前講座の実践では和洋女子大学文化資料館学芸員の梅原麻梨紗、吉岡邑子、見留武士の各氏に、アンケートの集計では村上涼子氏の助力を得ることができ、明治大学の吉田優先生からは有益なご助言をいただいた。文末ながら、記して感謝の意を表したい。

註

- 1) 文部科学省「学芸員養成課程開講大学一覧（平成 25 年 4 月 1 日現在）」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/gakugei/04060102.htm（2013 年 12 月 3 日検索）

参考文献

- 学術審議会学術情報資料分科学術資料部会 1996「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について（報告）－学術標本の収集、保存・活用体制の在り方について－」
- 駒見和夫 2010「学芸員課程履修に対する学生の意識調査とその分析－学芸員養成における専門性と実践力について－」『国府台』14 号 和洋女子大学文化資料館・博物館学課程 pp.18-21
- 駒見和夫・梅原麻梨紗 2011「和洋女子大学文化資料館におけるアウトリーチの実践と検討－小学校に向けた出前講座－」『国府台』15 号 和洋女子大学文化資料館・博物館学課程 pp.11-18
- 日本博物館協会 1993「平成 3 年度 博物館園数」『博物館研究』第 28 巻第 3 号 p.4
- 日本博物館協会 2013「平成 23 年度 博物館園数」『博物館研究』第 48 巻第 4 号 p.13

（和洋女子大学 教授）